

まだ書きたいことが一杯ある・・・・・・・・・・・

150

萩原良昭

まだ書きたいことが一杯あるが

あたかも、生命が消えてゆく時の様に、
雪の結晶ははかなく消えて行く。

僕は、その結晶の美しさが、消えてしまうのが
悲しく、あわれに感じた。

美は永遠に、その姿を保たないのか。

結晶体も、生命体も、おなじ。

自分と同じものを繰り返し、
つくつてははかなく、消えていく。

そう思っているのも、つかの間だった。

急行が駅のプラットフォームに

ゴーゴーとやかましく、
入ってきた。

いつべんに、まわりの静けさを
つぶしてしまった。

僕の気分も、つぶれてしまった。

ああ、これが現実か。
電車にガヤガヤ人が乗り込む。

伏見稻荷からもたくさん的人が乗る。
「ああ、今日は節分だなあ。」と気がつく。

今日は、急行、バスにも座れなかた。